

宗教・・・イスラーム教

1. イスラーム教とは

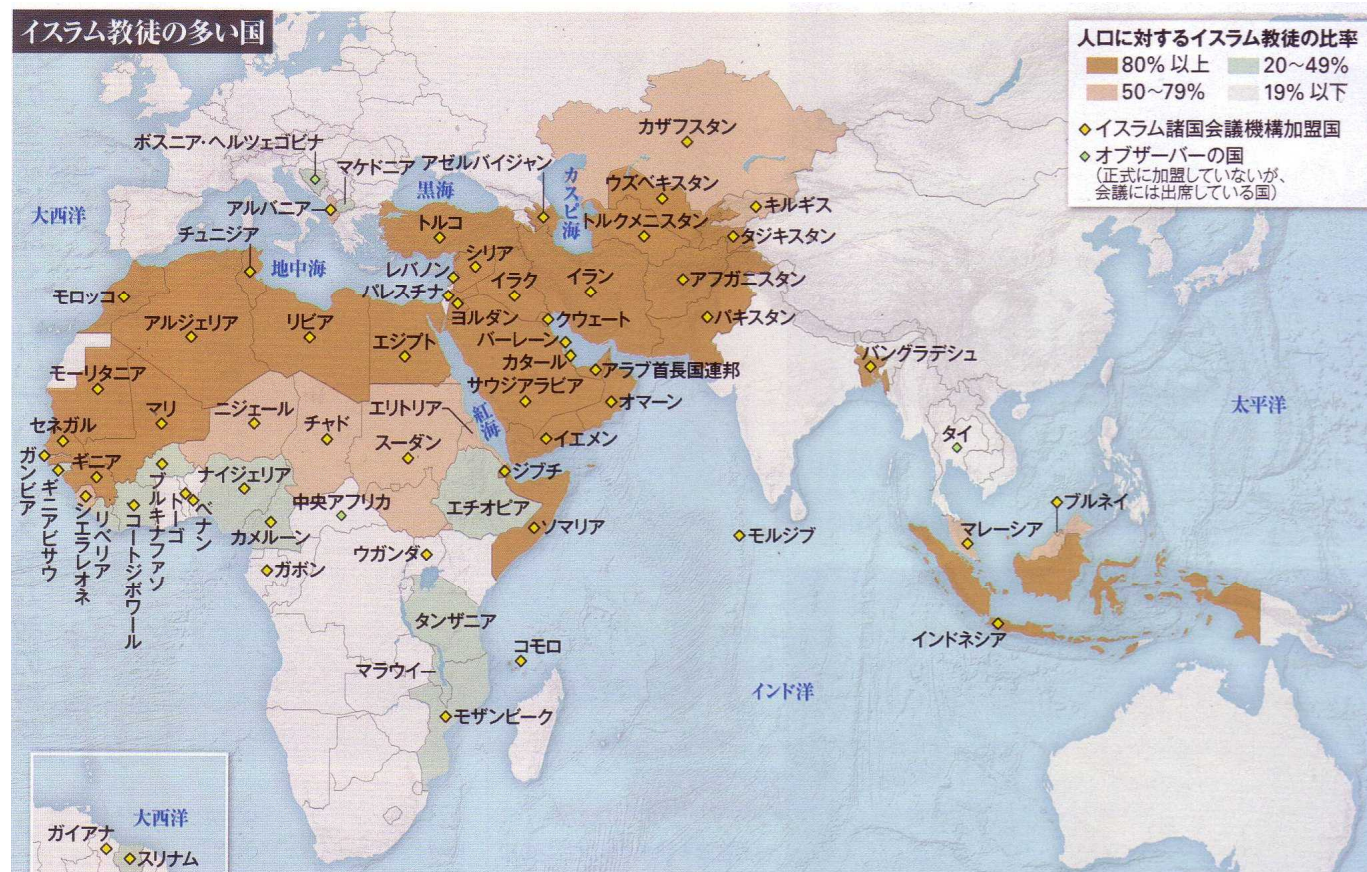
イスラーム教とは、アラビア人のムハンマド Muhammad (570~632 年) が天啓を受けてそれまでは多神教であったアラビアの民に与えたアッラーを唯一神とするユダヤ教のアラビア版に相当する宗教です。

ユダヤ教はヘブライ語の、キリスト教はギリシャ語の、イスラーム教はアラビア語の聖典を持つ一神教です。イスラーム教は自らをユダヤ教、キリスト教の姉妹宗教としており、この三つの宗教は同一の神の時代・場所だけを異にする同一の啓示と考えています。

イスラームとはアラビア語で神への絶対的帰依者の意です。

現在の教徒数は約 13 億人といわれ、教徒は下図のように全世界にあります。発祥の地・中東諸国では住民の大部分が教徒であり、中にはイスラーム教を国教と定めている国もあります。全イスラーム教徒に占める中東の人々の比率は約 2 割に相当します。

現代の世界情勢を読み解くには、イスラームに関する知識が不可欠です。



(「一個人／イスラーム教入門」JAN.2012、p43)

2. 創始者ムハンマドの生涯

ムハンマドが活躍した時代のアラビアの社会的背景を簡単に説明しましょう。

アラブ諸部族は自分たちはユダヤ教の開祖イブラーヒーム(アブラハム)の庶子イスマーイール(旧約聖書・創世記 16 章参照)の子孫であると自認していました。しかし、時代と共に人々の信仰は現世御利益型の多神教に傾き、各部族は部族守護神の彫像・聖画等約 360 体を聖地メッカのカアバ神殿に祀っていました。

この時代は部族保護社会で、各人の安全は復讐は 2 倍にして返す倍報法による部族間の相互牽制が有効であった沙漠の掟が支配する恐ろしい社会です。

ムハンマドは 570 年頃、マッカ(メッカ)において、支配部族クライシュ族の支族ハーシム家のアブドゥッラーの子として生を受けました。父は彼の誕生直前に亡くなり、母アーミナも彼が 6 才の時に亡くなり、祖父アブドゥルムッターリブに引取られましたが、この祖父も彼が 8 歳の時に亡くなり、代わってハーシム家の当主となった叔父のアブー・ターリブに引取られます。孤児として厳しい少年期を過ごした人です。当時のハーシム家は貧しく、祖父の頃の勢威を失っていました。

利発で正直なムハンマドは未亡人ハディージャが経営する交易商社に雇われます。彼が 25 才、彼女が 40 才の時に見込まれて結婚し、15 年間は裕福だが平凡な商人として過ごします。生活の心配がなくなった彼は、叔父のところから幼い子アリーを引き取って育てることもしています。子宝にも恵まれ、4 人の娘は順調に育ちました。

彼が 40 才の頃、時々近郊のヒラー山の洞窟に一人籠って禁欲生活に入るようになりました。ここである夜、天使ガブリエルの降臨と解する召命体験をします(クルアーン 96 凝血)。

……ムハンマドは再び拒否したが、天使は再度彼を強く抱擁し、遂に彼は忍耐の限界に達したと感じた。とうとう三度目の抱擁の後に、ムハンマドは新しい聖書の最初の言葉が、彼の口から注ぎ出されることに気がついたのだ。

「朗唱せよ、『創造主にして保持者なる汝の主の御名において／主は凝血から人間を創造した』 朗唱せよ、汝の保持者はいとも心寛き方／筆を執るすべを教えた方／人間に未知のことを教えた方だ！」
神の言葉が、始めてアラビア語で語られたのだ。そしてこの聖書はついには「クルアーン」(朗唱)と呼ばれるようになるのだ。……p192

……(山から逃げ帰った) ムハンマドは四つ這いになり、激しく震えながら、彼女の膝の上に身を投げた。「助けてくれ。助けてくれ！」と彼は叫び、神の臨在から彼を守ってくれるように彼女に懇願した。恐怖が幾分引いたとき、ムハンマドは彼女に彼が本当にマジューン(憑かれた者)になってしまったかと尋ね、ハディージャは急いで安心させようとして言った。「あなたは仲間に親切で思いやりがあります。あなたは貧しい者、捨てられた者を助けようとしているし、彼らの重荷を負おうとしています。あなたは、あなたの氏族が失ってしまった高い道徳的資質を再興しようとしています。あなたは客を尊び、困った人々を助けに行きます。だから、そんなことはありませんよ！」と。神は、そのような恣意的な仕方で行動したことはなかった。ハディージャは二人で彼らの従兄弟のワラカ・イブン・ナウファルに相談に行こうと提案した。彼は今ではキリスト教徒で聖書をよく学んで知っていた。ワラカはムハンマドがモーゼと予言者の神から啓示を受けて、アラブ人への神の使者となったのだということを全く疑わなかった。数年の期間を経て、ムハンマドは次第に本当にそうに違いないと確信するようになり、クライシュ族の人々に説教し始め、彼ら自身の言葉で書かれた聖書をもたらした。p194

(「神の歴史」Karen Armstrong／高尾利数訳：柏書房)

マッカでの布教：ムハンマドは用心深く布教を始めます。ハディージャに次いで友人のアブー・バクル、手で育てた従兄弟のアリー、解放奴隷で養子にしていたザイド等約 30 人です。こうした秘密の布教の 3 年を経て、クライシュ族全体に布教を開始します。しかし、以後マッカでの 10 年間は社会主義的主張を持つこの宗教は聖地にして商業都市であるマッカの支配階級クライシュ族にとって目の敵で、社会の下層階級を主とする信者が約 200 人となる頃には、クライシュ族からの圧力は耐え難く強力になります。加えて頼みのハディージャにもアブー・ターリブにも世を去られました。この年は「悲しみの年」と呼ばれます。



6 世紀のアラビア半島

(「興亡の世界史 06」／講談社 p23)

アブー・ターリブはイスラームに入信しませんが、支族長としての責任感から、甥のムハンマドを守り通しました。しかし、彼の死後、その後継者はムハンマドに敵対する者となり、ハーシム家としての部族保護を取り消します。ムハンマドは近くの町ターイフにも布教に赴きますが、石を投げられて拒絶されました。苦しい布教の時でした。

マディーナへの聖遷：この時期にヤスリブの住人がイスラームに入信します。彼等は自分たちの町へ来て、泥沼状態となったハズラジュ族とアウス族の部族抗争を調停してくれと頼みます。

ムハンマドは迫害により身の危険がある者から順次、行程2日離れたヤスリブへ出立させ、最後にアリーに自分が寝床に寝ているように偽装するよう指示を与えて、アブー・バクルと二人だけで密かにマッカを旅立ちます。既に暗殺の危険が迫っていたからです。この移住をヒジュラ(聖遷)と呼び、この622年が回教暦元年になります。ヤスリブはその後、マディーナ(“その町”の意)と呼ばれるようになります。

マディーナに着いたムハンマドは、マッカから移住してきた信徒たち、マディーナで待ち受けていたハズラジュ、アウス両部族の信徒たちの指導者となります。前者を移住者、後者を援助者と呼ぶようになります。この新しい共同体を発足させるに際し、ムハンマドは52条の「マディーナ憲章」を定めます。「(1)これは、予言者ムハンマドよりの、クライシュ族とヤスリブ在住の信徒たち及びムスリムたち、並びに彼等に従って、彼等と提携し彼等と共に戦う者たちの間の関係を律する文書である。」「(2)彼等は、他の人々とは異なる一つの共同体(ウンマ)を成す。」と謳います。**イスラーム共同体**の誕生です。

これに続いて10条にわたり、一々部族名を挙げて部族間の過去の抗争を清算するための規定が書かれており、ムハンマドがこの地に招聘された理由が明らかになっています。ヤスリブ在住のユダヤ諸部族の共同防衛参加についても37、38条に規定されています。「(42)本憲章の民の間で、悪影響が広がる恐れがある対立や紛争が生じた場合には、その裁決は神および神の使徒ムハンマドに委ねられなければならない。神は本憲章について違約を最も恐れ、執行に最も誠実な者を愛で給う。」とムハンマドの指導権・裁定権を定めています。

マッカとの戦い／バドルの戦い：624年、ムハンマドは約300人の軍勢を率いて、マッカの大商隊を襲撃しようとして、結局、迎え撃つマッカの軍勢約1,000人とマッカを120kmほど南下したバドルで対戦します。ムハンマドは水飲み場を占領し、歩兵・弓隊を横に展開して奮戦し、遂にマッカ軍を敗走させます。

ウフドの戦い：625年、マッカ軍は約3,000人でマディーナ近郊のウフドに攻め入ります。迎え撃つマディーナ軍は約700名、ムハンマドは数の劣勢を補うために夜陰に紛れてウフド山に登ります。戦闘が始まると地の利が働き、マディーナ軍優位で進み、戦闘がほぼ終了して戦利品の獲得に移る段階で、山上の弓隊が我慢ができなくなって下り、その乱れを見たマッカの猛将ハリードが騎兵隊で反撃し、本陣にまで突入されてムハンマドも傷を負います。翌日、ムハンマドは追撃戦を決行し、マッカ軍を追い払います。

塹壕の戦い：627年、クライシュ族は持てる影響力を全て動員して部族連合軍約1万人、騎兵600騎で進軍します。マディーナは三方を山に囲まれた要害で、開いた一方に塹壕を掘り、一気に攻め込めないようにします。塹壕で騎兵戦を阻まれ、歩兵戦では士気高いマディーナ側が優位に立ちました。2週間ほど持久戦が続きましたが、攻撃側は戦利品が得られないために部族連合を維持できず、何の戦果もなく撤退します。

マッカ征服：630年、ムハンマドは1万人の軍勢を率いて南下し、マッカに迫ります。マッカの指導者アブー・スフヤーンはムハンマドの陣営を訪れ、そこにアラビア半島の数多くの部族が加わっており、先にイスラームに入信した猛将ハリードまでいました。抵抗は無意味と思われ、遂に彼は「アッラーの他に神なし。ムハンマドはアッラーの使徒なり。」と言い表し、マッカは無血開城されました。ムハンマドはカアバ神殿に入り、「真理が訪れ、虚偽は消え去った。虚偽は何時も消え去るものである。」と唱えながら、360体の偶像を一体一体杖で倒しました。

最初は親密であったユダヤ人の3部族も、イスラーム共同体による社会革命が彼らの権力を奪うと恐れ、

バドルの戦いから塹壕の戦いにかけて抵抗するようになり、全てマディーナから追放されます。そしてムハンマドは祈りを捧げる方向をエルサレムからマッカの神殿カアバに変更します。(2牝牛)
遂に彼は全アラビアの王(カリフ)となりました。632年、彼はマッカに正式の巡礼を行ない、その6月、逝去しました。

3. クルアーン

聖典クルアーンは予言者ムハンマドの口を通して語られた神の言葉、約 20 年間に亘って断続的に下された啓示を、第3代カリフ・オスマーンが集積・編纂させて成立したものです。旧約聖書の創世記～サムエル記とキリストの福音の内容を知っていると、内容的に同一性が高いクルアーンを理解する助けになります。クルアーンは 114 章、6,240 節からなっています。構成としては後の時代のものが前に収められ、初期のものは後ろに収められています。

日本語にして凡そ 60 万字。因みに旧約聖書は約 130 万字、新約聖書は約 40 万字です。初期の啓示は数句から十数句で異常な緊迫感が漲り、謎めいた鋭角的な言葉が積重ねられています。時が経つに連れ、語句は長く散文的となり、何か重要な問題を提示すれば必ずそれに応えて神の啓示が下されるようになります。ごく最近まで、アラビア以外のイスラーム教諸国では、クルアーンの翻訳は禁止されていました(解説ということにすれば良い)。クルアーンは読誦を意味します。アラビア語の持つ荘重な美しさと宗教的陶醉感他は他の言語でなし得ません。単なる宗教的頑迷ではありません。



クルアーン光章冒頭頁
(「イスラーム帝国の興亡」 p165)

……クライシュ族の青年ウマル・イブン・アル・クッターブはムハンマドの激しい敵であって、古来の異教に献身していて「預言者」を暗殺しようとして構えていたが……彼は訪問していた「クルアーン」朗唱者を取り落とした原稿を取り上げ、読み始めた。彼はクライシュ族のなかで読み書きができる僅かな者たちの一人だったのだ。ウマルはアラビア語の口頭の詩に関する自他共に任じる権威であって、その言語の正確な意味について詩人たちから相談を受けていた者であった。だが、彼はこれまで「クルアーン」のようなものに出会ったことがなかった。彼は訝りながら言った。「この語りは、何と素晴らしく貴いものなのだ！」と。そして直ちに、新しいアッラーの宗教に改宗してしまった。その言葉の美しさが、憎悪と偏見の深みを突き抜けて、彼が意識していなかった心情の機微に届いたのである。……

(「神の歴史」 p203)

3・1 クルアーンの説く倫理・道徳

慈悲・謙遜：「よいか、孤児は決して苛めてはならんぞ。物乞いに決して邪険にしてはならんぞ。」(93 朝)
「アッラーに仕えまつれ。他の何者も、ともに崇めてはならぬぞ。両親には優しくしてやれよ。それから近い親戚や孤児や貧者にも、また縁続きの者や血縁の遠い被保護者、一緒に暮らした友、旅人、奴隷達にも。威張りかえった高慢な人はアッラーは好み給わぬぞ。」(4 女)

姦通：「姦通を犯した場合は男の方も女の方も各々百回の鞭打ちを科す。ことはアッラーの宗教に関して。もしお前たち本当にアッラーを信じ、最後の日を信じておるならば。そして、そのお仕置きには必ず数名の信者を立ち会わせること。」(24 光)

喜捨：「集まった喜捨の用途は、まず貧者に困窮者、それを徴収して廻る人、心を協調させた人(改宗し

て回教に入った人への慰撫金)、奴隷の身受け、負債で困っている人、それにアッラーの道(伝道活動)、旅人、これだけに限る。これはアッラーのお取り決め。アッラーは明敏、全知におわします。」(9改悛)

3・2 クルアーンの命ずる法律(イスラーム法)

委託：「孤児にはその財産を渡してやれよ。よいものを自分でせしめてその代わりに悪いものをやつたりしてはいけない。彼らの財産を自分の財産と一緒にして使ってはいけない。その様なことをすれば、大罪を犯すことになる。…だが、アッラーから保管を委託された財産を白痴に渡してはいけない。その金で食べさせたり、着せたりしてやるがよい。決して酷い口をきいたりしてはならぬぞ。孤児はよく試して見て、やがて結婚適齢期に達した時、立派な分別があると認めたなら、そこではじめて預かった財産を渡してやること。

かれらが成長しないうちに、先回りしてやたらに使い込んだりしてはいけない。(委託を受けた者が)金持ちなら欲を慎め。貧乏人なら適度に使え。そして財産を相手に渡す時には、正式に証人を立てよ。やがてアッラーがお一人で全てを清算し給う。」(4女)

相続：「汝等の子供に関してアッラーはこう命じておられる。男の子には女の子の二人分を。もし女が二人以上ある場合は、遺産の三分の二を貰う。女の子が一人きりの場合は、彼女の貰い分は全体の半分。子供がいなくて、両親が相続人である場合には、母親に三分の一。彼に子供がないが兄弟があれば、母親は、彼が他の誰かに遺言しておいた分から負債を引き去った残額の六分の一を貰う。…とにかくこれがアッラーのお決めになった分配法。まことにアッラーは全知にして至高の賢者におわします。」(4女)

利息：「アッラーは商売はお許しになった。だが利息取りは禁じ給うた。神様からお小言を頂戴しておとなしく利息をとることを止めるなら、まあ、それまでに儲けた分は見逃してやろうし、ともかくアッラーが悪くなさるまい。…アッラーは最後の審判の日には利息の儲けを跡形も無く消して、施しものには沢山の利子をつけて返して下さる。…これ、信徒の者、アッラーを畏れかしこめよ。まだ滞っている利息は帳消しにせよ。…また、相手が非常に困窮している場合には、事情がいくらか緩むまで待つてやること。貸しを全部棒引きにして喜捨とするなら、その方が遥かに己が身のためにもなる。…お互い同士、一定の期限付きで貸借関係を結ぶ場合には、それを書面にしておくのだぞ。誰か書式の心得ある者に双方の間に入って間違いのないように書いて貰うこと。」(2牝牛)

刑罰：「それから泥棒した者は、男でも女でも容赦なく両手を切り落としてしまえ。それもみな自分で稼いだ報い。アッラーが見せしめのために懲らしめ給うのじゃ。アッラーは全能、全知におわします。」

(5食卓)

報復：「これ、信徒の者よ。殺人の場合は返報法(ユダヤ教の説く「目には目を」)が規定であるぞよ。つまり、自由人には自由人、奴隷には奴隷、女には女。(一人に対して同格のもの一人の復讐である。イスラーム以前の一人殺されたら相手方の人々を倍も殺すという砂漠の掟はもはや許されない。)しかも殺人を犯しても相手の当事者が赦すと言った場合(“血の価”と呼び、金銭等による賠償)には正々堂々ところを運ばねばならんし、また本人の方でも立派な態度で償いの義務を果たすのじゃ。」(2牝牛)

3・3 クルアーンの説く禁忌

偶像礼拝：「汝らの神は唯一なる神。そのほかに神は絶対ない。…それなのにある人々はアッラーをさし措いていろいろな偶像などを担ぎ出し、まるでアッラーにでも対するような愛をそれに注ぐ。…アッラーの罰のいかに恐ろしいものかということが。」(2牝牛)

酒： 「これ、汝ら信徒の者よ。酒と賭矢と偶像神と占矢とは何れも厭うべきこと、シャイターン(サタン)の業。心して避けよ。」(2牝牛)

食品： 「宣言せよ。『わしに啓示されたもの(クルアーン)の中には死肉、流れた血、豚の肉—これは全くの穢れもの—それにアッラー以外に捧げられた不浄物、これらを除いては何を食べても禁忌ということにはなっていない。そればかりか、やむを得ず食ってしまった場合には、神様は大目に見て下さる。よくお赦しになる情け深いお方だから。』だが、ユダヤ教の人々には爪牙を持つ動物は一切御法度にしておいた。また牛や羊でも、脂身は、背中の上部と内蔵のところ、それから骨にからんでいる部分を除き御法度にしておいた。これは、彼らが不遜じゃからその報いじゃ。我らの言葉はことごとく本当のこと。」
(6家畜)

3・4 姉妹宗教であるユダヤ教徒とキリスト教徒に対して

「お前(ムハンマド)もきっと気がつくだろうが、信仰者(イスラーム教徒)に対して一番ひどい敵意を抱いているのはユダヤ人と、それから多神教徒。また、これもすぐ気がつくだろうが、信仰者に対して一番親愛の念を抱いているのは『我々はナザレ人』と自称する人々(キリスト教徒)。それというのは、彼らの中には司祭とか修道士とかいう者が沢山あって、みだりに傲慢な心を起こしたりしないからだ。」
(5食卓)

「彼らに言わせれば『ユダヤ教徒とキリスト教徒以外のものは絶対に樂園には入れて頂けない』と言うが、これはただ彼らの勝手な独り決め。言ってやれ、『それならその証拠を出して見せるがいい、もしお前たちの言うことが本当であるならば』と。…『キリスト教徒には根拠がない』とユダヤ教徒は言う。ところがキリスト教徒の方では『ユダヤ人には根拠がない』と言う。共に聖典を読んでいるくせに。…いずれ復活の日にアッラーが、彼らの論争に判決をお下しになるであろうぞ。」(2牝牛)

3・5 クルアーンの説く信仰

天国： 「だが、信仰を抱き、かつ善行をなす人々に向かつては喜びの音信を告げ知らせてやるがよいぞ。彼らはやがて潺々(せんせん)と河水流れる緑園に赴くであろうことを。その緑園の果実を日々の糧として供される時、彼は言うことであろう、『これは以前に私達の食べていたものとそっくりでございます』と。それほど似たものを食べさせて頂けるうえに、清浄無垢の妻達をあてがわれ、そこにそうして永遠に住むであろうぞ。」(2牝牛)

最後の審判： 「悪人どものしていることをアッラーがうっかり見過ごし給うなどと夢思ってはならんぞ。ただ暫時の猶予を与えていらっしやるだけだから。…大地も大地でなくなり、天もまた天でなくなる日、人々きそって唯一なる全能の神アッラーのお傍に駆け寄る日、この日こそ、あらゆる罪人ども互いに足枷に繋ぎ合わされた様を汝にも見せてやろうぞ。彼らの衣服はどろどろの瀝青、顔はすっぽり火に包まれる。これもみなアッラーが、一人一人の人間にその稼ぎ高に応じた報酬を与えようとてし給うところ。まことにアッラーは勘定早くおわします。」(14イブラーヒーム)

地獄： 「それともザクームの木がいいか。これは、悪者どもの責苦として、特に我らがしつらえたもの。これは、地獄のどん底に生える一本の木。その実はあたかも悪魔の頭。みんなそれを食わされて、腹は一杯。そこへ今度はぐらぐら煮えたぎるお汁を飲まされて…」(37整列者)

3・6 クルアーンに現れる旧約聖書と新約聖書の世界

失樂園： 「『これアダム。汝は妻と共にこの樂園に住み、どこなりと好むところで思う存分食べるがよい。但し、この木にだけは決して近寄るなよ。不義を犯すことになるぞ。』しかるにイブリース(サタン)は

二人を誘惑してこの禁を破らせ、二人をそれまでの無垢の状態から追い出してしまった。そこで我らは言った。『堕ちて行け、一人一人がお互いに敵になれ。地上に汝らの宿があろう。かりそめの楽しみがそこにあろう』と。」（2牝牛）

ノアの箱船：「我らはその昔、ヌーフ（ノア）をその民に遣わした。… こうして彼らは彼を嘔吐き扱いしたので、我らは彼とその一党を舟に乗せて救い出し、我らの神兆を嘘よばわりした者どもは全部溺死させてしまった。まことに目先のきかぬ徒であった。」（7胸壁）

アブラハムの試練：「主がイブラーヒームを試練に逢わせようとて或る言葉を出され、彼がそれを果たした時のこと。『わしは汝を挙げて人々の導師となそう』と主は言い給うた。イブラーヒームが『私の子孫末代まででござりますか』と言うと、『わしのこの契約は不義なる者どもには適用されぬ』とお答えだった。また、我らが聖殿（回教ではイスマーイールの建立とされているマッカのカアバのこと）を万人の還り来る場所と定め、安全地域に定めた時のこと。『汝ら、イブラーヒームの立処を祈祷の場所にせよ』と我らは命じた。

それから我らはイブラーヒーム及びイスマーイールと契約を結び、『汝ら兩人、このわしの聖殿を清掃して、ここにおめぐりに来る人たちや、お籠りの人たちや、また跪きひれ伏してお祈りしに来る人たちのために仕えるのじゃ』と言い渡した。」（2牝牛）

出エジプト：「イスラエルの子らよ。わしが汝らに施してやった嘗ての恩寵を憶い起こすがよい。… 我らが汝らのために海を裂いて汝らを救い、かつ汝らの見ている前でフィルアウン（パロ）の一族を溺死させたときのことを。また我らがムーサー（モーゼ）と四十夜間の契約を結んだ時のことを。」（2牝牛）

受胎告知：「そこで天使は宣言した、『これマルヤム（マリア）。かしこくもアッラー様の嬉しいお告げじゃ。お前は神から発する御言葉（ロゴス）を産みまつるであろう。その名はメシア。マルヤムの子イーサー（イエス）。そのお方は現世にても来世にても高き誉れを受け、神のお傍近き座につかれるであろう。揺籃の中にあっても、また成人してからも人々に話しかけ、ただしき人となられるであろう。』」

（3イムラーン一家）

3・7 その他

マホメットに対する啓示の性格：「誠に、我ら（アッラー）がお前に啓示したのは、嘗てヌーフとそれ続く予言者たちに啓示し、またイブラーヒームとイスマーイールとシスハーク（イサク）とヤアクーブ（ヤコブ）と十二支族と、イーサーとアィユーブ（ヨブ）とユーヌス（ヨナ）とハルーン（アロン）とスライマーン（ソロモン）とに啓示し、かつダーウド（ダビデ）に詩編を与えたのと全く同性質のもの。」（4女）

「現にこのクルアーンにしても、アッラーなしに頭で作り出せるようなものではない。それどころか、これこそは、先行する啓典（旧約聖書、新約聖書）を確証するものであり、かつまた、疑念の余地なく万有の主の下し給う啓示の書を解明するものである。」（10 ユーヌス）

クルアーンの説く聖戦：「現世を捨ててその代わりに来世を獲ようと志す者は、大いにアッラーの道に戦うがよい。アッラーの道に戦う者は、戦死してもまた凱旋しても、我らがきっと大きな褒美を授けてやろうぞ。…別にこれといって支障もないのに、戦時に家に居残っている者は同じ信者といっても、自分の財産も生命も擲って奮戦する者をアッラーは、家に居残る連中より何段も上に嘉し給う。勿論どちらの者にもアッラーは最上のご褒美を約束なさりはした。だが居残り組よりも奮戦組の方はずっと沢山報酬を下さる。」（4女）

クルアーンの名章とその節数																			章
3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	2 9	2 8	2 7	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	1 9	1 8	1 7
サード	ヤリ・スフィン	天使	サバア	部族同盟	跪拜	ルクマーン	ギリシア人	蜘蛛	物語	蟻	詩人たち	天啓	光り	信託者	巡礼	預言者	タル・ハー	マルヤム	洞窟
8 8	1 8	4 5	4 4	7 3	3 0	3 4	6 0	6 9	8 8	9 3	2 8	2 7	6 4	1 8	7 8	1 2	1 3	9 8	1 1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
7 6	7 5	7 4	7 3	7 2	7 1	6 9	6 8	6 7	6 6	6 5	6 4	6 3	6 2	6 1	5 9	5 8	5 7	5 6	5 5
人間	外衣に身を包んだ男	衣にかぶる者	妖霊	ヌーフ	外衣に身を包んだ男	外衣に身を包んだ男	筆	主権	禁断	離縁	似非信者ども	集会	戦列	調べられる女	言いがかりをつける女	鉄	恐ろしい出来事	お情け深い御神	月
3 1	4 0	5 0	2 8	2 9	4 4	5 2	3 0	1 2	1 2	1 8	1 1	1 1	1 4	1 3	2 4	2 2	2 9	6 9	7 5
1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0
人間	復活	信仰ただひと筋	腐つてしまえ	助け	無信仰者	カウサル	慈善	クライシュ族	象	中傷者	日ざし傾く頃	張り合い	戸を叩く音	駿馬	地震	神兆	定め	凝血	無花果
6	5	4	5	3	6	3	7	4	5	9	3	8	8	1	8	8	5	1	9
1 4	1 3	1 2	1 1	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0
人間	復活	信仰ただひと筋	腐つてしまえ	助け	無信仰者	カウサル	慈善	クライシュ族	象	中傷者	日ざし傾く頃	張り合い	戸を叩く音	駿馬	地震	神兆	定め	凝血	無花果
6	5	4	5	3	6	3	7	4	5	9	3	8	8	1	8	8	5	1	9

※井筒俊彦訳「コーラン」(岩波書店)に従った。章の名や節の数は訳本によって異なることがある。

左表は2012/1月「一個人／イスラム教入門」p91 に記載されたクルアーンの名章の全体像です。

ムハンマドは初期布教のマッカ期には激しい迫害に遭い、厳しい環境の中で布教せねばならず、そのためか文体は簡潔で、感情のほとばしりが激しく、意味の取りにくい句も少なくありません。全体として攻撃的な印象が強く、多神教・偶像崇拝を批判し、唯一神アッラーへの帰依を説く内容が多く見られます。これに対して

聖遷後のマディーナ期の啓示は宗教的環境が安定しており、叙述的で倫理的な行動規範を定めた内容が多く見られます。刑罰、ジハード、五行、婚姻等に関するものはマディーナ期に集中しています。イスラム共同体を築き上げて行く過程でそれらが必要とされたためです。

この章の参考文献

「コーラン」井筒俊彦訳／岩波文庫

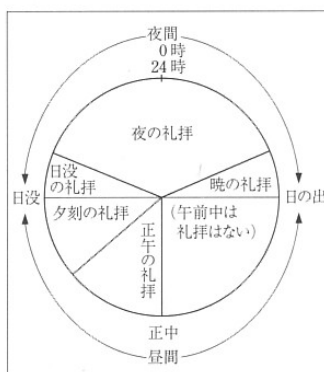
4. イスラム共同体

イスラム教は当時の経済格差や人種差別が激しかった**部族主義社会**を否定し、イスラム共同体に属する信徒は**全て神の前では平等**であるとし、相互扶助の精神を強調する**社会主義的主張の宗教**です。イスラム

教に入信して**ムスリム**(共同体の一員)になれば、全ての人は人間として平等との立場を取ります。

これは単なる信仰体系ではなく、明確な共同体構築の原理で、政府、法律、制度を規定しています。生活に関しても一日5回のメッカに向かつての礼拝、年一回(ラマダーン)と月暦で月一回の断食、食肉の禁忌・処理ルール、結婚・離婚、出生、相続、財産、利子、埋葬、割礼、喜捨、聖戦等の詳細な規定があります。

礼拝の規定：礼拝は左下の図表のように日に5回行います。礼拝の刻限はモスクの楼上より肉声の呼びかけで行います。「アッラーは偉大なり」で始まり「アッラーの他に神なし」で終わります。他の日はそれぞれの場所で礼拝しますが、聖日である金曜日の正午は全員モスクに集まって礼拝します。



イスラムの礼拝時刻表

(「イスラム帝国の興亡」p124)

礼拝はマッカの方角に向かって行います。このため、モスクには**ミフラーブ**と呼ぶ礼拝の方向を示す窪みが設けられています。(補遺参照)

礼拝の時にも全員平等の精神で礼拝します。法学者の説教が行われることもあります。

近傍の多数の信者を受け入れ可能な広いモスクは「金曜日のモスク」と呼ばれます。聖金曜日も礼拝の時間以外は制約がありませんので、モスク周辺には門前町ができ、商いの人々で賑わいます。

喜捨と断食：ザカート(喜捨)は農産物は収穫の1割、財産・商品は2.5%、ヒツジは40頭につき1頭等と規定されています。これが貧者の福祉に使われます。太陰暦9月のラマダーン(断食月)に入ると、1ヶ月間、暁から日没まで一切の飲食を断ちます。断食月の終わりには「断食明けの喜捨」が義務付けられており、一家の主が定量のコムギ、コメ、ナツメヤシなどを家族一人当たり約2.17kg現物で差し出し、直ちに貧者に分配されます。

太陰暦12月の巡礼の季節の犠牲祭ではヒツジ等を屠り、親族で食しますが、肉の3分の1は貧しい同胞のために分け与えます。犠牲祭とは、神の命令でアブラハムがイスマーイールを犠牲に捧げようとし、神がアブラハムの信仰を愛でて代わりの子羊を犠牲として受け入れた故事に因んでの祭りです。

ラマダーン明け祭と犠牲祭がイスラームの二大祭典で、約3日間、親類縁者が交歓したり結婚式が行われたりします。ラマダーン明けには使用人に心付けやボーナスを渡します。

イスラーム法：①クルアーンで定めたハッド刑(固定刑)は姦通・姦通の中傷、飲酒、窃盗、追い剥ぎ罪に適用します。②同害報復刑は殺人・傷害に適用します。「血の代償」(慰謝料)で済ませることも可能です。③裁量刑はそれ以外の犯罪に適用され、判例に基づいて裁判官が裁量します。

ハッド刑は現代の感覚では厳しすぎるので、サウディアラビア、イラン、スーダン等を除いては実施せず、他国は近代的な刑量に切り替えています。

同害報復刑は「目には目を、歯には歯を」と言われるもので、古代には受けた被害の何倍もの報復が通っていましたから、これに制限を掛けた温和な内容なのです。日本でも江戸時代の武士は藩に届け出て許可を得なければ仇討ちができませんでした。また、仇討ちの仇討ちは禁止されていました。

一夫多妻制度：イスラームではクルアーンによって、4人まで妻を持つことが許されています。これは、当時は戦いで夫を亡くした寡婦や孤児の救済のために設けられた処置なのです。現在の社会情勢は当時とは異なるので、トルコ、チュニジアでは国法で禁じ、一夫一婦制を施行しています。それ以外の国でも、婚姻契約に別の妻を娶らないという条項が設けられていることが多いです。

イスラーム金融：ムハンマド当時に高利貸し(相手の弱みに付け込み、年利50%も罷り通った)の社会問題があったようです。このためクルアーンは利息を禁じています。預金者は銀行でファンドと契約して有望な事業に投資し、その配当を受ける方式で資金を活用します。

5. ムハンマド後のイスラーム

宗教としてのイスラーム教の概要は以上の通りです。ここからはイスラーム教が社会現象になります。

その後、中世ではイスラーム勢力は大発展し、**ギリシャ哲学や科学の正統な後継者**となり、広大な版図に燦然と**都市文明の華を咲かせます**が、十字軍とモンゴルの侵略に痛めつけられて長期的衰退期に入り、産業革命による近代化に乗り遅れ、その領土は西欧諸国の草刈り場となって長い隠忍の時を強いられます。

だが、現代は「パレスチナ問題」「9・11同時多発テロ事件」「アフガニスタン問題」「イラクでのシーア派とスンニ派の抗争」「中東の石油と社会の大発展」等、イスラームが判らなければ世界情勢が読み解けない時代

となっています。以下に簡単ですが、解説してみましょう。

正統カリフ制の確立とリッダ戦争：マッカ征服後、イスラーム共同体にクライシュ族が大量参入したためにパワーバランスが崩れ、ムハンマドの死後、援助者(マディーナ住民)たちは移住者(マッカ出身者)たちとそれぞれの指導者を立てようと画策します。アブー・バクルがそれに反対し、援助者たちも結局は従って、全員の「臣従の誓い」を受けて、彼が「預言者のハリーファ(カリフ：後継者)」として最高指導者に就きました。ムハンマドの晩年にイスラーム共同体に入った部族長たちは、当時の感覚として優れた族長が去った後は、彼との連携はそこで終了するというものでした。そのような部族はザカート(喜捨)の支払を拒絶しました。アブー・バクルは「汝がムハンマドを信仰したのであれば、彼は既に世を去った。だが、アッラーを信仰したならば、アッラーは決して死ぬことはない。」と断言して、直ちに討伐軍を編成して、アラビア半島に散らばる遊牧部族を制圧します。猛将ハリードが各地に派遣され、次々と戦果を挙げます。イスラームに忠誠を貫いた部族や帰順した部族には寛大な対応がなされました。これをリッダ(背教)戦争と呼びます。アラビア半島はムハンマド時代以上にマディーナ政府の統率下に入りました。

大征服時代：新興イスラームはシリアに向けてその勢力を伸ばします。ビザンツ帝国は 12 万人の大軍を差し向けますが、猛将ハリード指揮するよく組織された士気高い 4 万人のイスラーム軍は 636 年、ヤルムークの戦いで勝利を収めます。翌年はエルサレムが無血開城し、イスラームはその聖地イスラエルを版図に加えます。



エルサレムの岩のドーム (私の撮影)

アブー・バクルの後継者・第 2 代カリフ・ウマルは 638 年、降伏したギリシア正教の大司教と会い、キリスト教徒とユダヤ教徒に「庇護民」の保護を与えます。イスラーム教、キリスト教、ユダヤ教という三つのセム的一神教がエルサレムに共存するようになり、エルサレムがイスラエルの領土となった今日も、この共存の約束は守られています。

ウマルはムハンマドの「昇天の旅」の出発点であった巨岩を見つけ、そこを聖域としてモスクを建てます。今日に残る「岩のドーム」です。

イラク地方にイスラーム側の部族が侵入したことからササン朝ペルシャとの戦いが始まります。637 年、大決戦にイスラーム軍は勝利し、642 年には最後の戦いでササン朝は止めを刺されます。600 年間以上も続いた古代の大帝国はあっけなく滅亡しました。

10 年間にわたり第 2 代カリフ・ウマルは大征服事業を進めてイスラーム国家の周辺から国際的な危険を取り除きました。彼は征服によって入ってきた莫大な収入をサービカと呼ぶイスラームに対する長年の貢献を評価する方式で俸給として配分します。彼は俸給を受け取る者の名簿を整備し記録する仕組みを作り、これが発展して官庁制度ができ、国家機構が整備されます。

彼が凶刃に倒れた時、ウスマーンがその後を嗣ぎます。彼は暗唱で伝承されてきたクルアーンを文書化して決定版を各地に送ります。現在、伝わっているクルアーンは全てこの「ウスマーン版」に依拠しています。第 3 代カリフ・ウスマーンの治世で征服活動は一旦小休止しました。

成長期には覆い隠されていた諸々の問題や不満が、停滞期には表に噴出します。「成長は七難を隠す」です。停滞期となった彼の治世の末期では批判、不満、反乱が渦巻き、遂にエジプト駐留軍の中の不満分子の兵士たちがマディーナに戻ってきて、警護者も置いていない普通の邸宅に住むウスマーンを襲って殺害する事件が起きました。

大内紛：ムハンマドの従兄弟であるアリーがその兵士たちに推挙されて第4代カリフに就任します。ウスマーンの家督を継いだシリア総督ムアーウィアはウスマーンの暗殺者を処罰せよと彼に迫り、彼のカリフ就任を認めません。このような困難な事情の中で彼の治世が始まります。

アリーはイスラームの理想に忠実であろうとします。その真摯な姿勢こそが後代の人々が彼を美化し、模範的な人物として崇拝する理由です。彼は政治形態を共同体的な統治に戻そうと努力しますが、既にイスラームの版図は帝国規模に拡大しており、そのような復古的な統治は政治的に相応しくなくなっていました。

ローマがカエサル時代に、共和制から帝政へ移行せざるを得なかったと同じ政治力学が働いているのです。彼の5年に満たない統治は内政の混乱、内乱、混沌の時代でした。アリーに反抗して蜂起したムハンマドの妻たちの中の3人がバスラを拠点として戦い、二人は戦いで死にます。

バスラの反対派を制圧したアリーは、ムアーウィアを攻めます。この戦いで嘗てエジプトを征服した智将アムルがムアーウィアの味方に就きます。戦いが膠着状態になり、調停が行われる段階になって、反乱者と同じ立場になって調停に応じることに憤慨した者たち数千人がアリーの陣営を離れます。

彼等は「立ち去る者たち」即ちハワーリジュ派となります。彼等は「信仰を持つ者だけがカリフになる資格がある」と考えます。彼等は「身内のウマイヤー門を重用したウスマーンは大罪を侵し、ムスリムでなくなった」「ウスマーンの復讐を果たそうとするムアーウィアも悪である」「悪であるムアーウィアと取引したアリーも悪である」との論理で、アリー、ムアーウィア、アムルに暗殺者を差し向けます。

661年、アリーだけが凶刃に倒れて正統カリフ時代が終わり、ムアーウィアがカリフに就任します。ウマイヤ朝の始まりです。

この内紛はイスラーム共同体に深刻な反省をもたらしました。何故、信徒の鑑となる人々が剣を交えて戦ったのでしょうか。各自が正義のためと思ひ込んで内紛を起こす危険を如何にして避けるべきか、その後、イスラーム法が体系化される過程でムスリム同士の戦いを抑止する理念が入念に盛り込まれます。例えば、国家レベルの戦いでのみ聖戦(ジハード)を宣言できるとし、宣言できるのはカリフに限るとの規定です。

カリフ制がなくなって、誰もが安易に「ジハード」を唱えて、收拾が着かなくなっているのが現代のイスラーム社会ではないでしょうか。

さて、内乱の終結と共に、大征服事業が再開されます。これから後の歴史は「人類と社会…中世から近世へ」に概要を述べましたので、そちらをご覧ください。

スンニ派とシーア派の誕生：シーア派とはシーア・アリー(アリーの党派)であり、ウマイヤ朝を認めず、アリーとその子孫がイマーム(宗教的指導者)になる権利を持つと考えます。

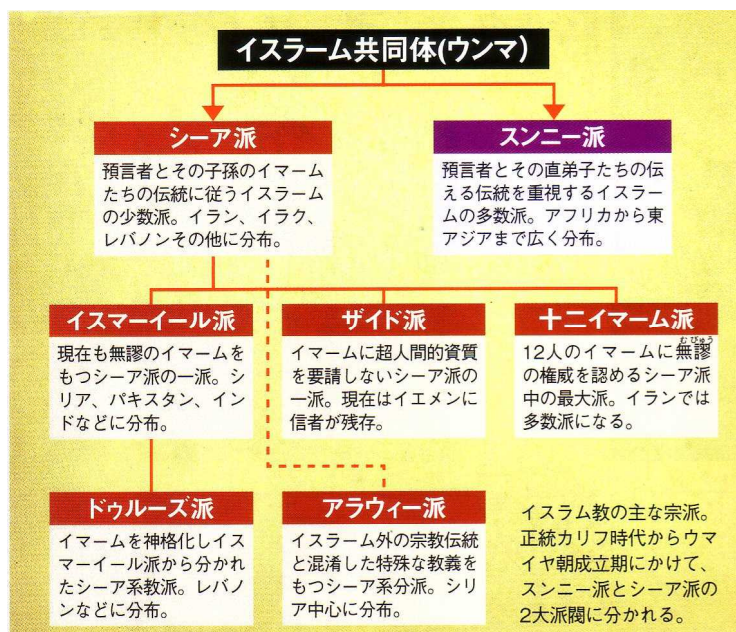
内戦時に多くのムスリムは戦いの帰趨を見守っていましたが、ウマイヤ朝が優勢になるとそれを認めた体制派がスンニ(“慣行”の意)派となります。

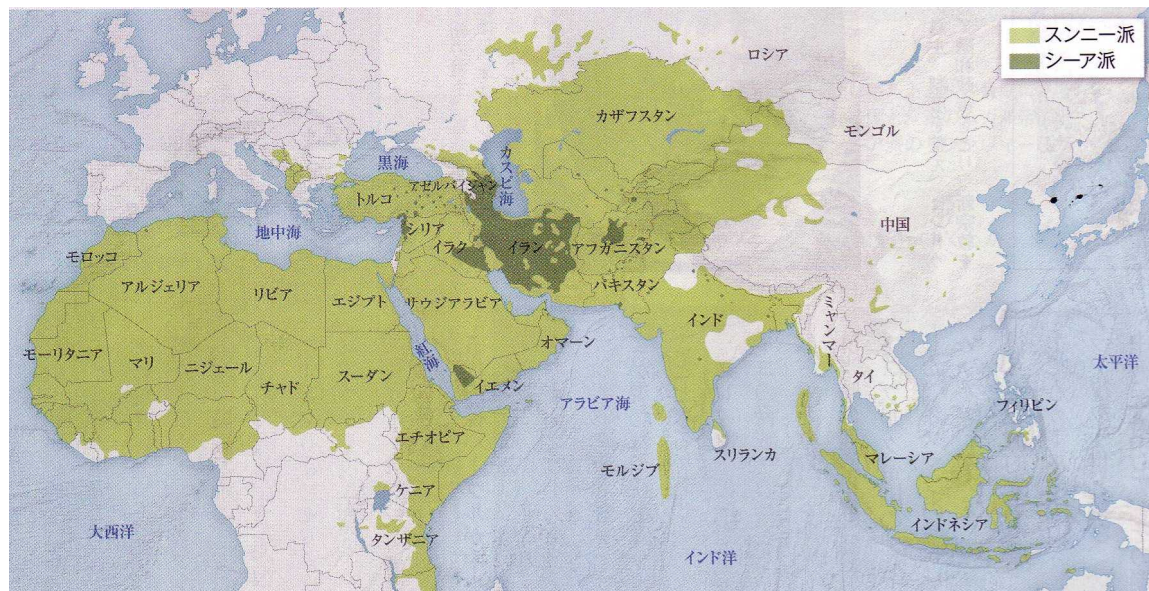
現在のイスラーム教の二大宗派はスンニ派とシーア派です。これらも更に分かれて、スンニ派ではマールイク派/シャーフイー派/ハナフィー派/ハンバル派/ザイド派/混合派です。

シーア派は12イマーム派/イスマエイル派/アラウィー派/ドゥルーズ派に分かれます。

右上の図は分派の流れを示した「一個人/イスラーム教入門」p84に記載のものです。

人口比率ではスンニ派9に対し、シーア派1くらいで、圧倒的にスンニ派が多数です。そのため、数で敵わ





スンニ派とシーア派の地理的分布 (「一個人／イスラム教入門」p84)

ないシーア派教徒には信仰隠し(ターキア)が許されています。「もし、シーア派であることが明らかになると危険が及ぶ恐れがある場合は、スンニ派のように振る舞って良い」とされています。

宗派が分かれ、年代を経ると、当然、お互いの信仰内容に進化が起こり、互いの違いは益々拡大します。これが宗教戦争を起こすのは歴史の必然でした。ここでその詳細に触れるのは控え、今日の世界情勢に関わる最小限の歴史的経緯だけ説明します。

シーア派とは：ハワリージュ派によりアリーが暗殺され、ウマイヤ朝が成立すると、アリーの長男のハサンがイマームの地位を嗣ぎますが、彼は穏和な人物で、ウマイヤ朝と妥協し、弟のフサインにイマーム位を委譲しました。680年にムアーウィアが没すると、クーファのシーア派がマッカのフサインに決起を促します。フサインが家族と70人の部下たちと共にシーア派の本拠クーファに向かう途中、カルバラーでウマイヤ朝に包囲され、殆ど全員が殉教します。684年、フサインを招いておきながら救えなかったクーファのシーア派が反乱しますが、制圧されます。シーア派の人たちはフサインの殉教を偲んでアーシューラーと呼ぶ哀悼行事を行います。祭りの数日前から殉教劇、殉教の語りが行われ、当日は男性はフサインの苦しみを再体験するため、自らの身体を手、棒、鞭、鎖などで打ち付けて血を流す葬列行進を行います。

750年にクライシュ族のアッバース家が「預言者の一族をカリフに」とのスローガンでシーア派を利用しますが、政権を取るとアッバース家がカリフを名乗り出、シーア派は監視される立場になります。

10世紀には例外的にシーア派の武装蜂起が成功し、各地にシーア派政権ができました。北アフリカのファターマ朝、イエメンのザイド派政権、イラクに12イマーム派のブワイフ朝などです。この王朝の時に「不可謬のイマーム論」「イマームのガイバ論と終末思想」などシーア派の根幹となる教義が確立しました。シーア派の信徒の9割を12イマーム派が占めます。スンニ派が政治的決定は共同体の合意に基づくとの立場を明確に打ち出し、

「スンニと共同の民」と自称し、シーア派と区別されるようになるのがこの時代です。

シーア派 (十二イマーム派)		スンニ派
ムスリム総人口の1割強を占める。1.6億人から2億人の間。	信者の数	ムスリム総人口約16億人の9割弱を占める。14億人程度。
シーア・アリー (アリー党) という語から派生した名称。	名称の意味	預言者から伝わる伝統をスンナ (範型) とする者の意味。
2大聖地に加えて、イマーム殉教地 (ナジャフ、カルバラーなど)。	聖地	2大聖地としてメッカ (カアバ聖殿がある)、メディナ。
イマームとして知られ、神と人間の間に立つ仲介者として、世界の秩序維持、魂の救済についての無謬の最高権威者。現在幽隠中。	最高の権威者	一般的にはカリフとして知られ、ムスリム共同体運営の責任者。トルコ共和国の成立に際して廃止され、現在不在。
通常の婚姻の他、期間、報酬を先に定める一時婚を認める。	結婚	正式に離婚するかどちらか一方が死ぬまで継続する契約。
基本的にスンニ派と同じであるが、礼拝時にイマーム殉教地の土で作った額当ての使用、イマーム殉教祭など、相違もある。	儀礼	一日5回の礼拝、ラマダーン月の断食、巡礼などが詳細に定められ、断食明けの祭りや巡礼月の犠牲祭が2大祭となる。

シーア派とスンニ派の相違点 (「一個人／イスラム教入門」p84)

1501年にイランにサファヴィー朝が成立して12イマーム派のブワイフ朝などで国教としたので、イランの



パフラヴィー二世
(Wikipedia)

シーア派化が進みます。次のカージャー
ル朝が倒されて1925年に世俗国家パフ
ラヴィー朝が成立し、パフラヴィー二世
(在位1941~1979年)が近代化路線と親米
路線をとったのに反撥した民衆が、フ
ランスに在ったアーヤトッラー・ルーホッ
ラー・ホメイニーの反米・反国王運動の指
導を受けて「毎日がアーシューラー、全
ての土地がカルバラー」と唱えるイラ
ン革命が勃発し、1979年、国王は亡命
し、イランは12イマーム派を国教とする
イスラーム神政国家に戻りました。(補遺参照)



メイニー師とハメネイ師の肖像画
(sekitori.web.infoseek.co.jp)

以下の文(アハマド・サラマティアン(Ahmad Salamatian)元イラン議員)は現在の中東の火薬庫イラン、イ
ラクの複雑な情勢を的確に述べています。宗教と政治が一体化するとどうなるかの見本です。

イラン大統領のモハンマド・ハタミ師は、2005年4月のパリ訪問の際に、自分の改革路線が失敗だった
ことを躊躇なく認め、「宗教そのもの、そして宗教と普通選挙の関係に新たに民主的な解釈を与えない限
り、宗教権力というものは民主的な方向に改革され得るものではない」と明言した。

「キリスト教およびキリスト教会の歴史」から得たというこの教訓は「宗教者が体制を支持し、公務員
と化す方向に傾きがちなスンニ派教権力というものは民主的な方向に改革され得るものではない」と明
言した。「スンニ派イスラームの歴史に照らしても明らかである」。

彼はさらに一抹の悔しさを滲ませながら、この経験から「篡奪によって樹立された政権に対する反発が
強く、正義の理念を深く組み入れており、規律の埒外にいられるという幻想を抱いていたシーア派につ
いても」まったく同じ結論に至ったとする。そして最終的に、超俗的な正統性を標榜するいかなる政治
体制においても、政権を担う者たちの一部が「一連の伝統や特権に認められる(と彼らが言うところの)
神聖さを守るという口実のもとに、あらゆる民主的な変化を妨げる力を持っている」ことを認めた。

イスラーム共和国の最も誠実な奉仕者の一人が大統領を務めた波乱の八年間は、少なくとも幻想を終わ
らせるという点で意義があった。

革命から25周年を迎えた今日、テヘランの政府首脳に対する失望を感じているのは白け切った若者だ
けではない。この失望は国家中枢部、そしてシーア派指導者層をも揺さぶっている。こうした世情は逆
説的にも、腐敗を憎み社会正義を求める国民をうまく引き付けたマフムード・アハマディネジャド(現大
統領)に有利に働いた。

イランとイラクでは、シーア派勢力が権力を手にした方法もまったく異なっている。テヘランでは、民
衆による革命によって政権が樹立され、王政を打ち倒して威光を放っていたカリスマ的な指導者に政治
が委ねられた。それに対してバグダッドでは、アメリカとその同盟国の軍事介入によって、ようやく独
裁政権が転覆され、さまざまな出自にもとづく何百もの政党に道が開かれた。

このため、イラクのシーア派運動は、他の政治勢力と協調し、占領者が押し付けた妥協案を呑む必要に
迫られている。アヤトラ・シスタニ師は巧みな戦術でシーア派のウラマーたちを糾合し、2005年1月の
選挙で勝利を収めた。とはいえ、シーア派共同体とその政治的、宗教的代表者の構成は複雑を極めてい
るので、うまくバランスを取り、民主主義に準ずる多元的な運営を行っていくことが求められる。さら
に、国内には多様な共同体が入り組んでおり、クルド人やスンニ派とも手を結ぶ必要があるので、イラ
クのようなシーア派勢力は、最も過激な勢力も含めて、イスラーム主義的な要求を弱めざるをえない。

スンニ派とは：シーア派とハワーリジュ派が抜けた後に残ったイスラーム教徒がスンニ派で、教徒数全体の9割を占めます。ムハンマドの慣行(スンニ)と共同体(ウンマ)の合意に従う人々を意味します。多くのアラブ諸国、トルコ、インド、東南アジア、中国、アフリカ諸国が属する体制派です。

イラク問題：イラクでは偶々シーア派が多数派でスンニ派が少数派でしたが、イラク第5代大統領のサッダーム・フセイン(在位 1979~2003 年)はシーア派を弾圧してスンニ派で体制を固める強権政策を採り、軍事力を強化してイランのパフラヴィー退位後の中東の強国となります。



1979 年のイスラーム革命後のイランの極端な反米政策に対抗して 1984~1988 年の間に米国のレーガン政権はイラク政府に 297 万ドルに及ぶ巨額の兵器提供を行い、国境紛争を名目にイラクがアメリカに代わってイランと戦う代理戦争をさせます。

フセインはこの時点で情勢を読み違えたのでしょうか、イラクが以前から自国領土だと主張していた沿岸の小国クウェートに 1990 年に侵攻し、領土宣言をしますが、**サッダーム・フセイン**石油利権の重大な変化を許せない米国が多国籍軍を糾合して第一次湾岸戦争となり、**(Wikipedia)**フセインは押し戻されます。前大統領ブッシュの父が大統領の時代です。ブッシュ父は賢明にもフセインが退いた段階で深入りせず、宗教問題がややこしい中東からさっと手を引きました。

2001/9/11 に米国はアフガニスタンに基地を持つウサマ・ビン・ラディン率いるアルカイダによる4機の航空機を使った同時多発テロを受け、ニューヨークの貿易センタービル2棟が崩壊し、2749人が亡くなります。建国以来、本土に被害を受けたことのない米国にとっては大ショックでした。直ちに多国籍軍を組んでアフガニスタンのアルカイダを攻めますが、ビン・ラディンを首謀者と特定しながら、2011/5/1 に隣国のパキスタンのイスラマバード郊外の隠れ家を米軍の特殊部隊が急襲して殺害するまでの10年間、捕らえることができませんでした。

米国のアフガニスタンでの軍事行動は、冷戦時代にソ連がてこずったと同じ理由で未だに一向に埒があきません。テロリストは民衆の間に隠れて行動するので、軍隊で叩ける相手ではないのです。

これでは米国民の鬱積した感情は晴れません。その国民感情の捌け口としてでしょう、大量破壊兵器(原爆・化学兵器・生物兵器・ミサイル等)を開発しているとの名目で、2003/3/20、予て人権問題で非難していたイラクを攻め、短期間で征服します。第二次湾岸戦争です。フセインを捕らえ、イラクの法廷にかけ、強権政治で犯した人権問題を理由に死刑にします。ところが、開戦の大義名分であった大量破壊兵器は全然見付かりません。フセインはアルカイダでもなく、9・11 事件に手を貸した訳でもないのですから、全然筋が通らない侵略行為・世紀の暴行でした。歴史はブッシュ大統領に厳しい評価を下すでしょう。

その後はフセインによる長年の弾圧という重しが取れたシーア派が動き出し、新生イラクの主導権を争ってスンニ派と血を血で洗う自爆攻撃が連日のように発生し、既に米兵だけでも 5000 人近い死者を出し、この事件の出口が何処にあるのか、現在時点では全く判りません。イラクを民主主義をイスラーム諸国に植え付ける拠点とするとの米国の大義名分も、今のところ実現できそうには見えません。

イスラーム勢力が強い地域では、尋常的手段では治安が保てません。教育機関としては神学校しかなく、そこで子供のうちからイスラーム原理主義を叩き込まれ、テロはジハード(聖戦)で、それで死ねば天国に行けると本心から考えているテロリストが相手です。

フセインの世俗政権は強権的な手法で統治しましたが、彼の治世ではシーア派とスンニ派の抗争もなく、両派の男女が結婚する場合も多かったのです。今はそんなことをしたらテロリストに殺されます。

強権政治のフセインと、民主主義のブッシュとどちらが良かったのでしょうか。

民主主義がベストではなく、強権政治が必要な時代と場所があるのかも知れません。

不安定な状況が続く中東・イスラーム世界： 親米派であるムシャラフ大統領のパキスタン、ムバラク大統領

のエジプト、アブドラ国王のサウジ・アラビア、カダフィ元首のリビアは米国には民主化を迫られ、政権を脅かす国内のイスラーム原理勢力への対応は難しく、先進国の世論からは強権政治に枠を嵌められて政治的に微妙なバランスをとるのに非常に苦勞をした時期がありました。

その結果、パキスタンを9年間統治してきた世俗派のムシャラフ大統領は国会の大統領弾劾を受けて2008/8/18に退陣し、現政権はイスラーム回帰の傾向を露わにして世界の不安定要因化しています。

エジプトを21年間統治してきたムバラク大統領は市民蜂起に遭って2011/2/11に失脚して現在のエジプトは軍の管理内閣の下にあり、今後どの方向に進むか、判断が難しい事態にあります。

リビアを44年間統治してきたカダフィ元首は市民蜂起に遭って、他民族の傭兵を動員、近代兵器を駆使して弾圧に努めましたが、結局は市民軍に惨殺されて政権は崩壊しました。

これら失脚した国家元首たちの長い統治期間と、失脚した時期を並べてみると、これらの国々が長い政治的安定期間の後に、突然、最近になって不安定になったことを知ってください。

イスラーム社会の政治的混乱は、今、正に進行中なのです。これで米国の思惑通りに民主政権が誕生すれば良いのですが、イスラーム過激派が政権を奪取してイスラエルや米国と強く敵対する可能性も高く、目下、中東全般に亘って政治的に非常に流動的な状況にあります。

反米側であるイランやシリアは世界経済を支配する米国の圧力で経済的に苦しみ、これまた苦勞しています。

中東にはイスラエル建国に伴うイスラーム教徒であるパレスティナ難民の問題が底流として存在します。

同じイスラームとしては本来はイスラエルの後援者である米国と仲良くするのは難しいことなのです。

イスラーム教の主張は我々の心情を打つ優れた内容を有します。しかし、この宗教は信徒の共同体が即ち政体という政教一体構造が強固に出来上がっています。

現代社会は嘗ては宗教が枠組みを決めてきた防衛、統治、福祉、民法といった機能を宗教から独立させ、国家が定める法律で運営する仕組みを作り上げています。これが近代化なのです。

イスラーム諸国の多くは宗教勢力が強すぎて、近代化が実現できないのです。このため、経済的発展も難しく、民衆は何時までも貧しさから抜け出すことができず、このような境遇に置かれているのは先進国の抑圧のせいだとの鬱屈した感情がイスラーム原理主義に走り、テロで復讐するという悪循環を招いています。

世界の不安定要因として、これからのイスラームから目が離せません。

存在感を増すイスラーム教徒：米国でもムスリム(イスラーム共同体の一員)の人口は600万人を越し、ユダヤ教徒の数(約570万人)を抜いています。フランスやドイツでも労働者として多数のムスリムが移入し、彼等が現地の言語や習慣に溶け込まぬ傾向があるため、教育等で苦勞しています。

イスラーム圏では産児制限は神の意志に逆らうとの考え方もあり(中世のイスラーム都市文明期では、産児制限は宗教的に合法化されていました)、今後20年間でムスリム人口は30億人に増えるとの見方(例：30年前のサウジアラビアの人口は800万人、現在は2,400万人)もあります。全体的傾向として、キリスト教徒の信仰心が希薄になりつつあるのに対して、近年、イスラーム教徒の信仰心はむしろ高まる傾向にあります。

また、石油価格高騰により中東の経済力の躍進は目を見張るものがあります。

イスラームが理解できなくては世界が理解できない時代に入りつつあります。

本テキストで参考にした文献：

「興亡の世界史06／イスラーム帝国のジハード」小杉泰／講談社

「面白いほどよくわかるイスラーム」青柳かおる／日本文芸社

「神の歴史」カレン・アームストロング／高尾利数訳：柏書房

「一個人／イスラーム教入門」JAN.2012：KKベストセラーズ

以上

補遺：

1. イランのイスラーム原理主義回帰革命

パフラヴィー王朝はコサック兵団の大佐だった父親レザー・パフラヴィーが1921年の軍事クーデタで浮上し、23年に首相、25年に国王を名乗ってから創設されました。ナチス・ドイツと友好的だった父王が、イランを占領した英軍とソ連軍に追放された後、1941年にパフラヴィー二世は22歳で王位を継承しました。

若い国王を「シャヒンシャー(王の中の王)」と呼ばれる独裁的で力強い王に変えたのは1953年の政変でした。父王の時代から軍部と王制の一体化がイランの特徴でしたが、この時から王は自らの生存と王制護持のため軍部と秘密警察「サバク」と国家警察の強化に努めます。国王は莫大な石油収入と近代化された軍部を背景に、西側の王室の中では最も権力を持った王となりました。国防費はイスラエルの3倍以上、兵器システムや近代的施設等の指導・運営のために来た多数の欧米人技術者の存在が国民の反感を買い、「国王打倒」の声に油を注ぐ結果となりました。

73年の石油禁輸による原油価格の4倍値上げをテコに、国王はイランを「西南アジアの日本」に変貌させる大計画に取りかかります。「白い革命」で知られるイラン経済・社会の大改革は女性のベールを剥がし、60%といわれる文盲退治、地主の土地所有禁止、石油化学プラント、ダム、病院建設と進展し、73年の第五次五ヶ年計画で偉大なる飛躍を目指します。76年から成長率が落ち始め、石油の価格体系の値崩れから産油量の35%減産に追い込まれ、国家予算は赤字化し、政情不安が起こり、伝統的なイスラーム教の規律が生きる社会と、パフラヴィー国王の大いなる夢とが正面衝突し、イスラーム革命が成功して王は1979/1/17 出国・亡命しました。「勤勉な日本人がいないイランは日本化に失敗した」と外電は伝えます。

パフラヴィー国王はワシントンで記者団に「王の仕事は個人的には頭が痛いことばかりでね」と本音を漏らしています。「他人は信用できない。友人もいない」と語る寂しい王でもありました。

嘗てのパキスタンのムシャラフ大統領が、民主化を迫る西欧の政治家に対して「貴方がたはパキスタンをご存知ない」と本音を漏らすのと同じ立場です。イスラーム教の強い国家を近代的国家に導くのは容易な事業ではありません。

この後、イランでは政府要人の処刑、同年11月にイランは米国資産を国有化し、米国はイランの預金120億ドルの凍結と断交を行い、互いに敵対して国交の正常化のないまま今日に及びます。

2. イスラーム圏の国々の国旗の特徴

ムスリムが大半を占めているイスラーム教の国々の国旗には、幾つかの共通性があります。

緑色はムハンマドのターバンの色でした。また、イスラーム発祥の地域は砂漠地帯で、植物を意味する緑色は大切にされました。

「月と星のマーク」は安心や平和の象徴です。砂漠の昼の太陽は命を奪いかねない危険なものです。夜に月や星が出ると涼しくなり、安心して休めます。中東地区では日暮れから1日が始まるのです。

「白・黒・緑・赤」の4色は20世紀初めに



太陽や月があらわれたデザイン、緑を基調とした色など
国旗に見るイスラーム圏の国々

(「一個人／イスラーム教入門」JAN.2012、p43)

アラブ諸国が団結して汎アラブ民族主義を掲げてオスマン帝国に対抗した時に制定された「アラブ統一旗」がその起源になっています。

3. 教義によりムハンマドや信仰の中心になる人物の顔は描かない（「一個人／イスラム教入門」p35）



使ジブリールに連れられ、天馬ブラクに乗って天界を巡礼するムハンマド。© The Bridgeman Art Library / amanaimages

見事な宗教画です。佛教やキリスト教の宗教画と似通った雰囲気を感じます。ムハンマドは自分は預言者であり、信仰の対象として偶像視することを禁じました。中央のムハンマドの顔を描いていないのはそのためです。佛教やキリスト教は偶像崇拝の誘惑に負けて、仏や神の見事な絵画や塑像を作り上げてしまいました。それに比較して、千数百年に亘って「偶像礼拝禁止」の掟を固く守ってきたイスラーム教徒の信仰の強さは見事です。



イスラーム教徒は1日に5回、メッカの方角へ向って跪ずいて礼拝します。モスクの内部にはその目印になるミフラーブ(半円筒状に凹んだ壁面)が設けられています。写真のモスクは「金曜日のモスク」と呼ばれるような地域の中核的寺院であり、装飾性に富んだ贅を尽くした造りになっています。ミンバルはイマームと呼ばれる導師が説教を行う演壇です。

補遺了